

三浦ヒロとダンス

—教育実践からの理論的結実—

安村清美
(鎌倉女子大学)

1. ダンスとの出会いと実践

1920年(大正9年)東京女子高等師範学校文科を卒業し、附属小学校訓導となった三浦は、1923年10月より1926年2月まで文部省在外研究員として体操研究のためヨーロッパ各地で研修を重ねた。

身体文化に関して、ヨーロッパでは、ダルクローズのリトミック、ボーデの体操、さらに、モダンダンス、モダンバレエと新たな思想と表現形式が隆盛の時代であった。一方、我が国における教育界では、新教育運動と呼ばれる、児童の自発性に基づいた教育観が広まり、舞踊界においても、『児童舞踊』という独自のジャンルが確立される時でもあった。

この経験と経歴は、その後の三浦の発言や行動を方向づけるものとなる。

このような時代の空気の中で、帰国後1926年4月から1935年3月までを東京女子高等師範学校教官として過ごし、この期に出版された著作から、三浦のダンスの実践と識見が読み取れる。

著作中には、尋常1年から6年までを対象に48曲が紹介され、とくに『春が来た』は、三著作に掲載されている。目的を、“上下肢、駆幹の運動の美的表現”とし、“単調に流されやすいといはれる歩法の練習を、興味づけながら指導”するために相当の時間を費し、“歌詞の内容について児童と共に研究を”し、“事実の審査ではなしに、その事実を通して春に与えられる私たちの気持ち、又はそれによって受ける喜びや楽しみについて、語り合ひ、考え合ひました。”さらに、自由練習によって“或気分には当然表れなければならぬ筈の身体の自然の動きがあること”まで導き、“デモンストレーションと鑑賞をもって結末とした”と結んでいる。

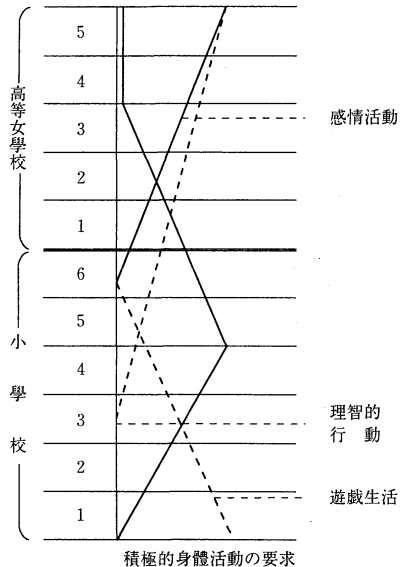
作品を練習することは、単に動きを覚えることに止まらず、生徒一人一人の生活実感や経験から生まれる感情がそこに生かされることによって本来の意味を持つこと、また、学習—指導の中で生徒と教師の交流を重視する考えが読み取れる。

2. 行進遊戯の指導からダンスを通しての教育へ

三浦は女高師時代の初期には、ダンスの中の体育的価値の豊かなものを行進遊戯と考え、体操指導要目の指針—身体的効果の重視—に論と実践を合致させようとするが、指導研究の集積から“ダ

ンスが体育材料として意義を有するのは、身体運動を通して情的方面の訓練に当たることである。…あくまで其の最終目標とすべき所は、感情の陶冶でなければならない。”*と、ダンス作品に内在する美的感情の追体験にこそ教育的意味を見出す。

また、対象の身体と精神の発達を見通した、体育におけるダンスの意味と、教材の選択についても独自の理念を提出している。(下図参照)



自らの置かれた立場(女高師教官)を越えた多くの発言は、当時の体育界では容易に受け入れられず、ダンスにおける身体と精神の両義性のもつ混沌は、それに気付いた三浦を職から遠ざけることになる。

3. 結びにかえて——三浦が残したもの

いくつかの小学校や附属学校での実践を通して、三浦がダンス教育の価値を上述のように見出していく過程は、とりもなおさずダンスの本質に接近していく過程でもある。当時の、教育学、哲学、芸術論、発達論を駆使して舞踊教育の意義を語り、論争した教育実践とその理論は、おそらく制度上の体育の枠組みには収まりきれなかったに違いない。

しかし、時間をかけて自己を見つめ個人の内面から湧きでる“高次の感情”に、作品を練習し内省を重ねる中で到達するというダンス教育の理想と方法論は、ダンスの内容と選択の幅が拡大した今日にも通じるものと思われる。さらに、三浦が突き当たった心身に関わるというダンスのもつ不合理性、矛盾を、いかに普遍化して教育の場に応用していくことができるかということは、現代の我々に残された課題でもある。

註) “…”は、三浦の著作より引用

*は、第46回舞踊学会シンポジウム資料参照